

古代東アジア文明と日本古代社会の接触の多様性

著者	馬場 基
雑誌名	日文研叢書
巻	42
ページ	469-480
発行年	2008-12-26
シリーズ	共同研究報告書 No. 87
URL	http://doi.org/10.15055/00005212

古代東アジア文明と日本古代社会の接触の多様性

馬場 基

奈良文化財研究所

はじめに

日本古代国家が、隋唐帝国の成立に伴う東アジア世界の緊張の中で、急速にその内実を強化し、中央集権化を推し進めたことはよく知られる。この過程で、律令制度をはじめとする様々な文物を大陸から取り入れた。日本の古代国家は、東アジア世界と密接に関わって成立・展開したのであり、対外交流を考慮に入れず日本古代史を語ることはできない。日本古代の対外交流に関する優れた研究が積み重ねられている。

さて、文物の輸入といえば、すぐに遣隋使・遣唐使が思い浮かぶであろう。確かに、かれらが果たした役割は非常に大きい。だが、これもよく知られるように、大陸からの渡来人の果たした役割もきわめて大きい。古代の対外関係は、一見、国家に一元的に収斂しているように見える。だが、こうした渡来人の存在や役割からもわかるように、少なくとも文物の輸入や人々の接触という点では、もっと重層的で多様であったと考えられる。

こうした状況の一面を、いくつかの材料から示してみたいと思う。

1. 長屋王と対外関係

前近代東アジア外交では、外交権は国王に集中する。一方、そうした国王が派遣した使節が、派遣先の臣下と豊かな交流の花を開かせた。長屋王が、佐保の宅に新羅使を招いて宴を催し、交歓したことはつとに知られている通りである（寺崎保広 1999 他）。

長屋王には史料 1 のようなエピソードも伝わる。鑑真が仏教と日本の深い縁を述べた言葉の一部分である。長屋王は仏教を崇拝し、縁に詩を刺繍した 1,000 の袈裟を造り、中国の僧達に送ったという。長屋王が非常に熱心な仏教信者であったことを示す逸話といえよう。確かに、いわゆる「和銅経」が残るように、長屋王の崇仏は深いと言えるが、飛鳥時代から奈良時代にかけての天皇・皇族・貴族に、仏教を崇拝した人物は非常に多い。その中で、唐にまで袈裟を贈った逸話が残るのは 1 人長屋王のみである。一方、『日本霊異記』の中で、長屋王はむしろ仏教に厳しく接し

た人物として描かれている（『日本霊異記』中巻第1「己が高徳を好み、賤形の沙弥を刑ちて、現に悪死を得し縁」）。すなわち、仏教への思いが強い、という理由だけでは、唐に袈裟を贈った伝承が、長屋王にだけ伝わっていることは理解できない。仏教への思いは、当時の天皇・皇族・貴族達にとっては大前提である。それが、国内の僧侶ではなく、唐の僧侶へ袈裟を贈るという方法で発露した点こそ注目すべきであろう。つまり、長屋王が他の皇族・貴族より豊かな国際性を有していた、と考えられるのではないか。唐に袈裟を贈る、という発想も、それを実現できたことも、国際的知識と国際性がなければ不可能なことであろう。

こうした長屋王の国際性・国際的知識と関連して注目される点が二つある。一つは、長屋王の所領や封戸の場所であり、もう一つが宗像氏との強いつながりである。

35,000点にのぼる長屋王家木簡は、古代史を語る上で欠かせない資料となっている。この木簡群によって、長屋王家の活動が様々な方向から明らかになったが、その一つに長屋王家の所領・封戸の分布やその経営形態などがある。特に注目したいのが、長屋王の所領・封戸は、交通路上の重要地点に展開する傾向が見られる点である。奈良盆地からの交通に沿ってその様子を見てみよう。

長屋王の所領は畿内を中心に展開する。この中に「片岡」がある（岩本次郎 2001）。片岡は、現在の王寺町から香芝町にかけての地域であり、大和川が奈良盆地から大阪平野に流れ出す、のど首にあたる。奈良盆地の西に横たわる生駒・金剛山系を越える峠はいくつか存在するが、その中でも河川を伴うこの竜田越えは、奈良盆地と大阪平野をつなぐ交通の最重要拠点である。古く、隋使・裴世清もこのルートを通ったと考えられ、聖徳太子が斑鳩地域に拠点をおいた理由の一つも、こうした交通との関わりを想定することができよう。隣接する山には古代には高安城、戦国時代には信貴山城が築かれ、このルートににらみをきかせた。長屋王は、こうしたエリアに所領を有していたのである。

大阪平野に入ると、河内国および摂津職の管内である。このうち、摂津地域と特に深い関係を感じさせる史料2～4のような木簡が出土している。

いずれも、長屋王邸から出土したということの意義を、どのように位置づけるべきか、解釈が難しい木簡である。この点については、また別の機会にきちんとした整理を提示したいと考えている。本稿で必要な範囲を確認すると、以下の様になると考える。「津税使」という語は「津の国＝摂津」の「税使」の存在を示し、「税使」は各国の役人か中央からの派遣か等の問題は残るが、封戸に関わることは確かであろう。したがってこの木簡から、長屋王の封戸が摂津にあった可能性が高い。また、住吉からの贅の木簡は、他には確認されていない。住吉といえば、贅戸がすぐに想定されるが、もしそれらからの贅であれば、宮内からも発見されてしかるべきであ

ろうと思われる。住吉郡からの贅の木簡も、やはりこの地域と長屋王の一定の関係を示唆するであろう。住吉と長屋王の関わりを示す木簡として、やはり長屋王家木簡に史料5の木簡がある。長屋王は、摂津とも深いつながりを持っていたといえる。その中でも住吉が目立つ。住吉は難波とならんで古くからの港湾であり、上述の竜田越えから真西に進んだ場所にある点も注目されよう。

さて、畿外の長屋王家木簡の荷札で、目立つ国は近江・越前・周防・讃岐であることが指摘されている（森公章 2000 他）。ここで特に注目したいのは、讃岐と周防である。この2カ国は、瀬戸内海航路の要地なのである。

瀬戸内海航路では、多くの島嶼が集中するエリアで潮の流れや変化が激しく、航行上の難所となる。こうした島嶼が集中する地域は瀬戸内海の東西両端部分にあたる。そしてそこに面する国こそ、讃岐と周防であり、この2カ国を押さえることは瀬戸内海航路を押さえることに非常に近い。特に周防国からの木簡では、島嶼部の西端部に横たわる周防大島の木簡が目立ち、この地域との深い関係をうかがわせる。こうした状況から考えると、長屋王は封戸等を通じて瀬戸内航路の要地と密接な関係を築き、航路を押さえていたのである。

そして、その瀬戸内海航路の延長、北部九州とも強いパイプを有していた。長屋王の父・高市皇子の母は、筑前宗像氏の一族出身である。宗像氏は、宗像大社や沖の島の祭祀と関わる有力な豪族で、地域への影響力はもちろん、海上交通の面でも重要な一族であったと考えられる。こうした宗像氏と高市皇子一族との関係は、長屋王の世代にも引き継がれていた。長屋王邸からは、史料6～8の木簡が出土している。

九州の徴税品は、大宰府に集められ、一度府庫に収められてから、場合によって都に送られる、というのが通例である。ところが、この荷札をみるかぎり、宗形郡司から直接長屋王邸に送り届けられている。ここに、長屋王と玄界灘の雄族・宗像氏との直接的で密接な結びつきを見いだすことができる。

以上の状況を整理すると、長屋王は奈良盆地内から玄界灘の沖の島までの交通の要地を見事に押さえて、様々に関係を結んでいた状況がみえてくる。そしてその玄界灘の先は、いうまでもなく朝鮮半島であり、中国大陆である。沖の島の祭祀は、そもそも大陸との航行の安全を祈願したとされる。長屋王にとって朝鮮半島や中国大陆は、我々が想像するよりもはるかに身近であったと考えられよう。

こうした環境や実力が、長屋王の国際性の源泉だったのではなかろうか。そして、いわゆる遣唐使や遣新羅使などの使者とは異なった、こうした「国際性」のチャネルが存在したことは、非常に興味深い。確かに、長屋王の例は特殊かもしれない。だが、国家間の通交のみではカバーしきれない、多様で重層的な、地下水脈的交流

の一端がうかがわれるように思われる。こうした水脈が、後代日宋貿易の際に王臣家が競って北九州に拠点を確保しようとした例にもつながるのではないだろうか。

2. 木簡からみた文化受容の重層性

次に、木簡の文字や用法から、日本の文化受容の状況の一部分を検討したい。

古代人は、文字や詩文を習得するために、しばしば木簡や不要になった土器に文字を記した。こうした練習や学習の文字を「習書」と呼んでいる。習書の内、都で目立つのは『千字文』の習書である。たとえば、7世紀に遡る飛鳥池木簡には史料9の木簡があり、奈良時代に入って平城宮周辺では史料10の木簡が、さらに平城宮から遙かに離れた左京七条（諸司厨町の可能性も指摘されている）からも史料11の木簡が出土している。また二条大路出土の2点の木簡（『平城京木簡3』5100号・5104号）は、現行の千字文では「来暑往秋収冬蔵」とする部分をどちらも「来暑往収秋冬蔵」とする。全く同じように語順が異なっており、現行とは異なる語順で書かれた同一のテキストを参照しながら習書した可能性が考えられる。あるいは、同一人物が、誤って記憶してしまったのかもしれない。さて、この『千字文』は、漢字版のいろは歌の様なものである。漢字の習得には適しているが、漢詩や学問の体系的取得とはいささか様相が異なる。

『千字文』以外では『文選』も比較的目立つ。こちらは優れた詩文を集めた書物であり、『千字文』より学問的である。だが、彼らの習書の仕方にはある特徴がある。史料12のように書名だけを習書してみたり、史料13の様に、『文選』に李善が注を付けたものを、その前文から習書している。典籍の学習で、注を学ぶ重要性は理解できるが、その前文を習書したり、あるいは題名を何度も記す理由はよくわからない。これらから考えると、典籍の内容をしっかりと理解しようと学習しているのか否か、疑問に思えてしまう。むしろ、機械的に教科書の冒頭部分を写しているようである。『文選』全体を体系的に学習した痕跡は必ずしも濃厚ではない。

こうした学習の様子は、『論語』の習書にもうかがえる。『論語』は、おそらく非常にポピュラーだったと考えられるにもかかわらず、日本でのその習書の出土例は必ずしも多くはない。『論語』の習書でも目立つのは『千字文』同様タイトルのみを記したものであり、本文を習書している木簡は飛鳥・藤原地域で3点ほど、平城地域で3点ほど、そのほかの各地で4点ほどである（『論語』・『千字文』の受容については、東野1977も参照）。

このように、習書から見受けられる状況は、学問としてあまり体系的とは言えない。むしろ、この他にも漢詩や典籍を習書した例はあるが、それ以外の例えば上述の『千字文』や後にふれる「難波津の歌」の例の方が圧倒的に多い。さらに、部首

の共通する文字を書き連ねたり、ある文字だけを繰り返し書いた、いわば単純な文字の練習や「手すさび」の例はさらに多い（習書木簡の漢字学習上の位置づけは、渡辺 2007）。

学令規定などに依れば、大学寮に入学するような律令官人達は経史に広く通じていなければならない。遣唐使として派遣された粟田真人はその博学ぶりを中国側から賞賛されるほどであるから、上記の状況とはずいぶん異なっているように感じる。

こうした違いの理由は、習書木簡を残した人々と、粟田真人の様な人々との文化的（場合によっては身分的）階層差に由来すると考えられる。つまり、体系的に中国文化を学習するような人々は、ごく限られた貴族や知識人である。彼らは、漢詩文を読み、創作するような知識や力量まで必要とされた。こうした人々は、人数が少ないためそもそも書き記す文字量が多くない上、おそらくは紙を使用することが多く、木簡に習書する場面はそれほど多くはなかったであろう。

一方、下級官人は、実務的に必要な範囲で漢字文化を習得すれば良い。彼らは人数的には非常に多く、書き記した漢字の量も多い。また、経済的理由などから、紙をふんだんに使える環境にはなかったはずである。こうした人々が彼らに必要な範囲で漢字を学習し、練習した名残が、習書木簡や習書された土器であろう。

日本における漢字文化の受容状況には、限られた人々による体系的な受容と、多くの人々による実用的・限定的な受容が存在した。前者は、比較的緩やかに増加するものであると考えられる。一方、後者の様な文字利用に対する要請は、律令制の導入と律令文書主義の浸透に伴い短期間で大幅に増加したのと考えられる。そして習書木簡などに見られる文字は、後者の文字文化を反映したのと考えられる。大衆化した漢字文化によって、古代日本の識字率は大幅に向上したのであろう。

だが、こうした状況で、注目されるのが、史料 14・徳島県観音寺遺跡から出土した論語木簡である。この木簡は、四面に墨書を有する「觚」と言われる形状（種類）の木簡である。觚は、中国では典籍の学習等に利用されて広く存在する。韓国でも多くの出土例が知られるが、日本では非常に珍しく、他には数例しか知られない。この形状は、大陸の影響のもと、あえて選択した形状である可能性が考えられる。

書かれているのは『論語』学而編の一節などである。『論語』が書かれていることが確認できるのは一面（左側面）のみであり、他の面に書かれた内容は必ずしも明瞭ではない。いずれの面も典籍の様にも見受けられるが、出典などはよくわからない。また、加工痕跡や墨書との関係などからも、現在の形態や記載内容が、木簡が最初に作成された時点からのものか、二次的に加工され文字が書き直されたものか、慎重に論じる必要がある。

ただし、『論語』の書きぶりは本格的であり、『論語』の部分は題名や一部分だけ

を抜き書きしたのとは様子が異なる。現行テキストとの差異から、テキストを見て書写したのではなくそらんじた文言を書き記した可能性も指摘されており（徳島県教育委員会 2002）、背後に本格的な『論語』の学習が存在していたと考えられる。他の面もしかるべき典籍であるとするならば、これらも含めての体系的な学習が存在したと言えるのではないだろうか。こうした場面で、觚という形状が選択されていることは、重要である。

韓国・金海の鳳凰洞遺跡からも、やはり『論語』を記した觚が出土している。観音寺出土の『論語』木簡は、古典的・伝統的中国文化に非常に良く合致し、韓国に類例が求められる、と評価できる。そしてこうした木簡が、都城ではなく徳島＝阿波地域で出土している点に注意を払う必要がある。

また、史料 15 は、近年釈読に成功した木簡である。この木簡中の「品」字は、上下を反転させた（上に二つ口が並び、下に口が一つ付く）字形である。こうした字形は、国内では他に類例が見あらず、様々な字形を集めた字書として定評のある『五体字類』にも収められていない。漢代やそれ以前の金石文などに見られるもので、中国でも古い字形ということができるとであろう。伊予国で、日本ではあまり用いられない、中国の古い時代の字形が使われていた。古代日本で「正統的」ではない古い字形を知る人物が、伊予国に居た、ということなのである。

この2点の木簡は、日本の漢字文化受容が、まず中央政府に集まって、そこから全国に流れた、という単純な構図では理解できない面があることを示している。すなわち、各地に、独自に獲得した漢字文化が存在していた可能性があると考ええる。一方、中央では律令制の施行・運用に伴い急激に多く必要となった文字使用者を大量生産する過程で、実用的で画一的な漢字文化の世界が形成された。そしてこの都城の実用的・画一的漢字文化が、やはり律令制の浸透に伴い大幅に増加する必要が生じた地方社会への人的往来や様々なルートを通じて流れ込んでいったという状況が想定されると思う。

では、こうした地方独自の漢字文化はどのようにして形成されたのであろうか。一つには渡来人集団の影響が考えられる。大橋育順氏によれば、徳島には渡来人が集中的に配置されたとみられる郡があるということである。渡来人が、祖国での集団のまま地方に配置される例は多く、こうした集団が漢字文化の一つの母体となったのであろう。もう一つは、外征など様々な場面での朝鮮半島との交流を通じて、各地の地方豪族が漢字文化を獲得した可能性である。5世紀代に繰り返された朝鮮半島への出兵は、地方豪族を動員しての軍隊であったと考えられ、こうした際に現地との様々な交流があったことも伝えられる。的はずれな想定ではないと思う。

長屋王にみられた、多様なチャンネルによる対外交流は、漢字文化の受容という

場面でもその可能性を見いだすことができた。国家間の交流のもつ影響力は圧倒的である。だが、その背景には、地方豪族たちを主役とし、それと結んでの皇族・貴族層の対外交流も存在したと考えられる。後者もまた重要な対外交流であり、その実りも少なくなかったと思う。

3. 紫香楽出土歌木簡と文化受容の重層性

さて、先頃紫香楽宮遺跡出土木簡中に、「難波津の歌」と「安積山の歌」が表裏に書かれていた木簡（史料 16）があったことが再発見された（栄原永遠男 2008）。難波津の歌というのは

難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花

という歌で、王仁が仁徳天皇即位を言祝いで歌ったという。一方、安積山の歌は

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾思はなくに

という歌で、『万葉集』巻 16 に収められている。難波津の歌は、木簡や墨書土器にもしばしば書かれており、ポピュラーである。万葉仮名表記で書かれ、時に訛りを反映したような独特な例もある。一方、『万葉集』の歌が書かれた木簡の発見は初めてのことである。国文学の専門家からは、人々の間で愛唱されていた歌が、徐々に定型化され『万葉集』に収められた様子がわかる、などの指摘が相次いだ。

紫香楽宮遺跡出土ということは、都城出土木簡である。都城やその周辺で、安積山の歌が流布していたということは、平城京や恭仁京、あるいは藤原京や難波京でも発見される可能性を示唆する。また都城には全国から人が集まり、また全国に散っていく文化的拠点であるから、さらに広く全国あらゆる古代の遺跡で「安積山の歌」が見つかる可能性も出てきたといえる。さらに、紫香楽宮遺跡出土であるので、時期は天平 17 年前後に絞られる。時期が限定できる点でも資料的価値が高い。

そして、私が注目したいのは、「難波津の歌」と「安積山の歌」が表裏に書かれていたという点である。残念ながら、この木簡は非常に薄い破片であり、もともとのような形状の木簡で、どのように使われたのか判然としない。それぞれの歌が 1 行に書かれていたとすると、非常に長大な木簡に復原される。しかし、材はごく薄いため、しなってしまうし、使用に耐えたか疑問点が多い。また、表裏の文字も、写真等をみると非常に似ているように見えるが、それでも同一人物の文字とみるべ

きか、別の人物の文字とみるべきか、意見が分かれている。文字を書き始めた位置が、表裏で異なる点も気になる。この木簡が作られ、使用された場面や、表裏の記載の関係は、慎重に検討しなければならない。

だが、同じ木片に書かれたこと、またその木片は非常に薄くなんども削り直すことができる状態ではなさそうなことなどを考えると、表裏にそれぞれの歌が書き記された時間差はそれほど大きくない。したがって、「難波津の歌」と「安積山の歌」という二つの歌が、ほぼ同じ時間・同じ空間に存在していたことは確かといえる。

「難波津の歌」と「安積山の歌」が、セットとして意識されていたかどうかまでははっきりとしないものの、同時に併存しており、非常に近い関係で捉えられていたことは間違いないように思う。

よく知られているように、この二つの歌は『古今和歌集』仮名序で、和歌の父と母として掲げられている歌である。国風文化の粋ともいうべき『古今和歌集』仮名序で和歌の父母としてセットとなると認識されていたこの2首が、天平時代にはすでに非常に近い関係の組み合わせとして存在していたことは、大いに注目されるべきである。

古代日本は、朝鮮半島・中国から様々な文物を移入して、文明化を推し進めてきた。7世紀半ば以降は加速度的に唐風化が推し進められ、8世紀には匍匐礼から立礼へと身のこなし方も唐風化した。天皇の服装も例外ではなかった。それと対応するかのように、国家形成期に花開いた『万葉集』の世界は8世紀半ばに幕を下ろし、漢詩文を愛する唐風文化の時代がおとずれる。すでに述べたように、対外交流のチャンネルも、漢字文化の受容も重層的で多様であったが、滔々と流れ込む巨大な唐の文化は都を通じてこうした重層性を押しつぶし、日本全体を唐風文化一色に染めていったかの様に感じられる。

しかし、今回の木簡の発見は、中国文化が押し寄せ、漢詩文が一世を風靡するなかでも、脈々と『万葉集』以来の和歌文化がはぐくまれ、継承されていたことを実によく示している。急激な唐風化の時代においても、日本の土着的文学が受け継がれ、発展していたと捉えることができると思う。逆に言うと、唐の文明の受容が、確かに社会に大きな影響を与えたことは確かであるが、完全に唐風化するほど激烈なものではなかった、ということになる。日本の律令は、唐令を適宜変更しながら日本の国情に合わせたことは夙に知られる通りである。表面的には急激に唐風化する一方、国家体制は一定の改編を加えて国情に合わせ、基層部分はほとんど変化しない、という、「文化受容における重層性」をこの「安積山の歌」の木簡が改めて提示してくれた様に感じられる。

そして、おそらくこのあたりが朝鮮半島と大きく違う点かもしれないと思う。新

羅では独自の年号は用いず、中国の年号を用いた。姓も漢字1文字が多い。また、韓国語にしめる漢字語の割合は、日本語におけるそれより遙かに多いという。固有の文字をもったのも、日本が9世紀～10世紀ごろなのに、朝鮮半島では13世紀、ハングルの発明を待たねばならなかったのである。中国文明の影響を直接的に受けた朝鮮半島と比べると、重層的に受け止めることができた日本の特性がより際立つように感じられる。

おわりに

以上、古代日本の「文明」との接触が、様々な意味で重層的である、ということを書いてきた。一見、画一的に感じられる日本古代社会にも、様々な文化が存在し、時にそれらはそれぞれ東アジア世界と結びついていた。古代国家による文化の画一化は大きな影響を与えたが、それでもこうした多様性と重層性は存在した。唐風文化＝中国文明の受容においても、そうした多様性と重層性は存在した。そのまま真似をする場合も、手を加えて使う要素も、比較的關係なく独自に発展・継承せる世界も存在したのである。

(参考文献)

- 岩本次郎 2001「木上と片岡」『長屋王家・二条大路木簡を読む』奈良国立文化財研究所、初出 1992。
- 甲賀市教育委員会 2008『甲賀市・史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡）出土木簡記者発表資料』。
- 寺崎保広 1999『長屋王』吉川弘文館。
- 東野治之 1977『正倉院文書と木簡の研究』塙書房。
- 徳島県埋蔵文化財センター編 2002『観音寺遺跡 I 観音寺遺跡木簡篇』。
- 森公章 2000『長屋王家木簡の基礎的研究』吉川弘文館。
- 渡辺晃宏 2008「日本古代の習書木簡と下級役人の漢字教育」京都大学人文科学研究所『漢字文化三千年 国際シンポジウム報告書』。
- 栄原永遠男「万葉歌木簡記念講演会」2008年5月25日信楽中央公民館。

史料1『大和上東征伝』

(前略)・・・又聞、日本国長屋王、崇敬仏法、造千袈裟、来施此国大德衆僧、其袈裟縁上繡著四句一曰、山川異域、風月同天、寄諸仏子、共結来縁、・・・(後略)

史料5『平城京木簡1』四三〇号

住吉郡大□里使一石
192・20・5 033

史料2『平城京木簡 1』四五四号

「封」北宮進上 津税使
300・27・3 043

史料6『平城宮発掘調査出土木簡概報』23、一四頁下段

宗形郡大領銅醬
103・28・3 032

史料3『平城宮発掘調査出土木簡概報』21、二九頁下段

住吉郡交易進贄塩染阿遲二百廿口之中
大阿遲廿口

小阿遲二百口

219・21・6 031

史料7『平城宮発掘調査出土木簡概報』21、三四頁上段
(『同』25で釈文訂正。)

宗形郡大^(領耐カ)□_鮓
116・27・4 032

史料4『平城宮発掘調査出土木簡概報』28、四六頁下段

住吉郡_賣□□□□
171・(14)・2 031

史料8『平城宮発掘調査出土木簡概報』27、二一頁下段

宗形郡大領
(77)・24・2 039

史料15 『平城宮木簡1』四一八号

伊与国神野郡駅家品除^{〔和カ〕}□尔志白米五

184・33・6 031

史料16 紫香楽宮出土「歌木簡」

・奈迹波ツ尔…^{〔久カ〕}□夜己能波□□由己^{〔母カ〕}□

・阿佐可夜…

流夜真 (79+140)・(22)・1 081